

16世紀ヴェネツィアの門閥家系

— サン・マルコ財務官就任者の分析より —

和 栗 珠 里

はじめに

ヴェネツィアで貴族共和政が確立されたのは、中世後期のことである。すなわち、のちに「セッラータ (Serrata)」と呼ばれることになる一連の法的手続きによって、大評議会 (Maggior Consiglio) の議員資格が特定の家系の世襲特権となり、これらの家系が貴族階級として定義づけられた⁽¹⁾。そして、この政治体制は、ナポレオンの侵攻によってヴェネツィア共和国が滅亡する1797年まで、ほとんど変わることなく維持された。

ヴェネツィアの貴族たちは、法的な意味において完全に平等であった。貴族家系に属する成年男子は等しく参政権を持ち⁽²⁾、共和国元首であるドージェをはじめ、大半の国家官職は大評議会で行なわれる選挙で選ばれた。しかし、歴史上の多くの共和政体の例に漏れず、平等の原則にもとづく共和主義は、ヴェネツィアにおいても建前にすぎなかった。実際には、貴族階級の内部にも経済力や社会的影響力にもとづく格差があり、一部の有力家系に権力が集中することは避けられなかったからである⁽³⁾。

このような寡頭支配的・門閥政治的な傾向は、15-16世紀に強まった。有力家系は、15世紀にヴェネツィア共和国の支配圏がイタリア本土に広まると、いち早く資本を土地に移し、地主化して経済的基盤を安定させた⁽⁴⁾。また、婚姻関係のネットワークをはりめぐらせて選挙を有利に運び、主要官職を半ば独占した⁽⁵⁾。彼らの経済力と政治的影響力はさらに、一族の者を高位聖職につけることも可能にした⁽⁶⁾。聖俗両界における高い地位は、富と力がます

ます彼らの手に集中する循環を生み出した。そして、15世紀後半以降、ヴェネツィアをとりまく諸情勢が激しく揺れ動く時代になると、この循環がさらに効力を発揮して貴族階級内部での階層分化が進み、寡頭支配がますます強化されていったのである。

では、具体的にどのような家系、どのような人々が、ヴェネツィアの寡頭支配層を構成していたのだろうか。実は、この問いに答えることは、さほど容易ではない。ヴェネツィアの政治組織は複雑に入り組んでおり、権力が一極に集中していたわけではないからである。また、ほとんどの官職は任期が短く、任期終了後には任期と同じ長さの再選禁止期間 (*contumacia*) が設けられていた。ごく一部の例外を除き、同一人物が同一ポストに長くとどまることを許さないようなシステムが機能していたのである⁽⁷⁾。もっとも、有力者たちは、十人会 (*Consiglio dei Dieci*)、ドージェ顧問官 (*Consigliere Ducale*)、サヴィオ・グランデ (*Savio Grande*) などの要職や外国への大使を歴任することで、権力の中核近くにとどまり続けた。グレンドラーはこの点に注目し、主要官職歴任者のプロソポグラフィカルな分析によって、16世紀半ばから17世紀初頭のヴェネツィア共和国の政治的リーダーであった人物群の特定を試みた⁽⁸⁾。また、フィンレイや藤内も、数多くの要職就任者・歴任者やその出身家系の例を挙げている⁽⁹⁾。しかし、これらの先行研究は「家」に主眼点を置いておらず、この時代における有力家系は、漠然と断片的に指摘されているにすぎない。

本稿の目的は、寡頭政が最も強まったとされる16世紀のヴェネツィアで権勢をふるっていた門閥家系を特定することである。その指標として、サン・マルコ財務官 (*Procuratore di San Marco*) 就任者に注目する。サン・マルコ財務官は、ヴェネツィア共和国でドージェに次ぐ高位官職であり、ドージェをローマ教皇に例えるならば、枢機卿に例えることができる地位である。ところが、レインが示した権力構造の模式図には含まれておらず、ヴェネツィア共和国官職を網羅的に紹介したカッペッレッティも「二次的な官職」に分類している⁽¹⁰⁾。先述のグレンドラーや藤内も、権力の中核に位置するもの

としてサン・マルコ財務官を挙げていない。それはおそらく、同官職が政策決定や法制定に直接関与するポストではなかったからであろう。しかし、後述するように、サン・マルコ財務官は財政的にも社会的にもきわめて大きな機能を果たしたうえ、15世紀後半以降は政治的にもレインの言う「インナー・サークル内輪」⁽¹¹⁾の一部と重複していたのである。しかも、ドージェを除けば唯一の終身職であり、他の官職とは違って恒久的に保つことのできる地位であった。したがって、同官職の地位を得た人々を分析することにより、ヴェネツィアの門閥家系を具体的に明らかにできるであろう。

本稿では、まず第一章でサン・マルコ財務官の職能とその重要性について概観したのち、第二章で16世紀における就任者の分析を行ないつつ、考察を加えることにする。

一、サン・マルコ財務官

(1) サン・マルコ財務官の起源と職能

サン・マルコ財務官は、その名が示すとおり、もともとはサン・マルコ聖堂の施設および財産の管理責任者として設置された⁽¹²⁾。1152年にオット・バシリウスなる人物がドージェから任命されたのが最も古い記録とされるが、おそらくは聖堂が最初に建設された9世紀から、その管理を担当する役職が存在したと考えられている。その後、サン・マルコ聖堂が公的な儀式を行なう「国家の聖堂」としての性格を強めるのにしたがって、サン・マルコ財務官の重要性も高まった。経験豊かで世評の高い長老格の人物が選ばれることが多かったサン・マルコ財務官は、住民たちの尊敬と信頼を集め、遺言の執行人や遺贈信託の代理人に指定されたり、財産の管理を委託されることが時代とともに増えた。また、遺言のない遺産の管理運営や処分、後見人のいない未成年者・精神障がい者の保護も、サン・マルコ財務官の職務となった⁽¹³⁾。

ヴェネツィア共和国が飛躍的な発展を遂げた13世紀には、サン・マルコ財務官の任務も膨大な量になったため、それらを処理するための増員が行なわ

れた。当初は1名であったが、13世紀の間に漸次追加されて4名となり、1319年には6名になった。これら6名は2名ずつ3つの下部部局に区分された。本来の職務であるサン・マルコ聖堂の財産やサン・マルコ広場周辺施設の管理を担当したのは、「デ・スプラ」の財務官（Procuratore de Supra）たちである。ほかの2つは、「デ・チトラ」（Procuratore de Citra）と「デ・ウルトラ」（Procuratore de Ultra）で、都市を二分する大運河の兩岸のうち、前者はサン・マルコから見て「こちら側」（カステッロ地区、サン・マルコ地区、カンナレージョ地区）、後者は「むこう側」（ドルソドゥーロ地区、サン・ポーロ地区、サンタ・クローチェ地区）の資産や遺言に関する任務を担当した。1443年には、各部局でさらに1名ずつが追加され、計9名がサン・マルコ財務官の定員となった⁽¹⁴⁾。

当然ながら、貴族である財務官たち自身が細かな雑務にいたるすべての任務を処理していたわけではない。むしろ彼らの地位はサン・マルコ財務長官とでも呼ぶべきものであり、実務を担当したのは、おもに市民階級に属する多くの職員たちであった⁽¹⁵⁾。サン・マルコ財務官には、住居と仕事を兼ねた官舎が与えられた。サン・マルコ広場に面するProcuratieがそれである。この語は通常、建物だけでなく財務官の職もさすが、本稿では役所としての意味を込めて「サン・マルコ財務庁」と訳し呼ぶことにする⁽¹⁶⁾。

（2）財政的機能

サン・マルコ財務官がヴェネツィア共和国の財政に果たしていた機能の重要性は、ミュラーによって明らかにされた⁽¹⁷⁾。サン・マルコ財務官は、ヴェネツィアで最も重要かつ人気の高い聖堂であるサン・マルコに寄進され続ける莫大な資産・財宝の管理・運営に加え、その高い信用度ゆえに住民だけでなく外国人からも財産や遺産の保管や運用を委託された。また政府の他の部局も、罰金収入や差し押さえ資産、戦利品などをサン・マルコ財務庁に預けた。1262年以降は、政府公債の収入の一部がサン・マルコ財務庁に預けられて、そこから利子が支払われるようになった。さらに、ヴェネツィアで徴収

される教会税までもがサン・マルコ財務庁に預けられた。要するに、公・私・聖・俗のあらゆる領域に属する巨額の現金・動産・不動産がサン・マルコ財務庁に流れ込んでいたのである。

個人から預かった財産は原則として手つかずのまま保管されたが、遺産は遺言により慈善や投資に向けられた。当時の一般的な習慣として、遺産の一部を複数の宗教団体（教会・修道院・施療院など）に寄進したり貧者への施しにしたりすることが遺言書で指示されたが、現金がそのように振り分けられただけでなく、不動産から得られる家賃収入や地代収入を永続的に喜捨に充てることが好まれた。そのため、寿命の限られた個人ではなく、役所としての持続性を持つサン・マルコ財務官が遺言執行人として指定されやすかった。その結果、膨大な不動産の管理とそこからの収入の活用がサン・マルコ財務官に委ねられたのである。また、サン・マルコ財務官に託された遺産の別の一部は、政府公債や商業に投資され、そこから得られる利益が遺族に与えられたり慈善に利用されたりした。こうしてヴェネツィアでは、個人の遺産がサン・マルコ財務庁を通して社会福祉の財源や商業資本として活用されるシステムが形成されたのである。

国家財政にとっても、サン・マルコ財務庁は貴重であった。それは、同庁が政府公債に深く関わっていただけでなく、緊急時に頼ることのできる潤沢な準備金を常に保有していたからである。実際、戦費調達のための融資がサン・マルコ財務庁に求められたり、サン・マルコ財務庁に預けられた公金が公的な負債の償還に利用されたりした事例をミュラーは挙げている⁽¹⁸⁾。

(3) 権威と権力

サン・マルコ財務官の重要性は、財政面に限られていたわけではない。とりわけ、富の再分配を行なうことに起因する社会的影響力は大きかった。D・ロマーノは、第65代ドージェとなったフランチェスコ・フォスカリが、サン・マルコ財務官時代にその地位を利用して多くの貴族や市民・庶民との間にパトロン-クライアント関係を形成・強化したり、姻戚関係にある家に便宜を

図ったりし、それによりドージェ選挙を有利に運んだと推察できることを明らかにした⁽¹⁹⁾。ロマーノはたとえば、貴族ジョルジョ・モロジーニの遺産が貧しい娘の嫁資に利用された事例を挙げる。モロジーニは、1377年作成の遺言書で、遺産のうち15,000ドゥカート⁽¹⁹⁾を政府公債に投資し、その利子収入から、貴族の娘ならばひとり30ドゥカート、貴族でない場合は20ドゥカートを嫁資として与えるよう指示していたが、対象者の選考はサン・マルコ財務官に任されていた。フランチェスコ・フォスカリを含む3名のサン・マルコ財務官は、1416年から1419年の間に8名の貴族の娘と79名の非貴族の娘を受給者に選んだ。8名の貴族のうち、フォスカリが選んだのは2名で、それぞれ先妻と後妻の一族であった⁽²⁰⁾。

上の例をひくまでもなく、サン・マルコ財務官はヴェネツィア共和国で最高の地位に登りつめるための最も有効かつ最終的なステップだった。慣例的に、ドージェはサン・マルコ財務官のなかから選ばれたからである。例外もあったが、15・16世紀にドージェに就任した27名のうち、サン・マルコ財務官でなかった者はわずか4名にすぎない⁽²¹⁾。そもそもサン・マルコ財務官には長老格の人物が選ばれることになっていたので、そこからドージェが選ばれるのは当然の成り行きであった。

実際、サン・マルコ財務官であることは、それ自体がきわめて名誉なことだった。たとえば、^{スクォーラ・グランデ}大兄弟会の会員名簿を見ても、称号つきで名前が記載されているのは、ドージェ、サン・マルコ財務官、騎士、博士などだけである⁽²²⁾。もっともそれは、他の官職が永続的なものではなかったという理由もあったであろう。15世紀末から16世紀はじめのヴェネツィアで日々起こる出来事を詳細に綴ったサヌードの『日記』では、他にも元老院議員やドージェ顧問官、十人会の長などに称号が付されているが⁽²³⁾、いずれにせよ、サン・マルコ財務官は、常に「プロクラトーレ」という古代風の称号をもって呼ばれたのである。その名誉は、すでに見たように、決して形式的なものではなかった。

サン・マルコ財務官の権力は、15・16世紀にっそう強化された。本来、特定の個人やグループに権力が集中することを極度に怖れるヴェネツィアの

共和主義は、外国への大使や海軍の指揮官などの特別職は例外として、サン・マルコ財務官が他の官職を兼任することを禁じていた。ところが、1454年、投票権をともなう元老院議員の永久資格をサン・マルコ財務官に与えることが定められたのである⁽²⁴⁾。ミュラーは、この措置の目的はサン・マルコ財務官の権限拡大ではなく元老院の権限を制限することにあつたが、結果的に政策決定への参加と他の官職を兼任する可能性をサン・マルコ財務官に認める結果を生んだと考察している⁽²⁵⁾。実際、1496年には、サン・マルコ財務官の職を保持したままサヴィオ・グランデに選出されることが可能になり、1523年には、「定数枠外委員 (zonta)」として十人会に出席し投票する権限が与えられた⁽²⁶⁾。サン・マルコ財務官は、財政や社会保障に関して大きな影響力を持っただけでなく、権力の中枢、まさしくレインのいう「^{インナーサークル}内輪」に深く入り込むようになったのである。

サン・マルコ財務官は終身職であつたため、その高い名誉と実質的な権力は生涯保たれた。しかも、サン・マルコ財務官の地位そのものが、名誉と権力をさらに増大させることを可能にした。そうであれば、名望を求めるヴェネツィア貴族がサン・マルコ財務官の地位を手に入れるためにどんな代償も厭わかつたとしても不思議はない。そして、16世紀には、そのような野望が比較的容易に実現される機会が生まれたのである。

(4)官職売買

ヴェネツィアにおける共和主義的理想の崩壊は、16世紀初頭に導入された官職売買によって最も「悪名高く」象徴される。すなわち、カンプレー同盟戦争(1509-17年)や断続的なオスマン・トルコとの戦争による財政難を打開するため、国家に多額の融資を行なった者に政府内の地位を与えるようになったことである。1510年、2,000ドゥカートを提供した10名の貴族に元老院議員資格が与えられたのを皮切りに、1514-15年には成年(25歳)に達しない若者への大評議会議員資格授与や資格年齢に達しない者への官職被選出権授与が広範に行なわれ、ついに1516年には、ドージェに次ぐ最高官職である

サン・マルコ財務官をも含む多くの官職が「販売」されるに至った⁽²⁷⁾。

1516年は、1509年のアニヤデッロの戦いで大敗を喫したのち巻き返しを大々的に展開していたヴェネツィアが、失地回復の完了を果たしつつあった時期にあたる。この年のブレシャ奪回と翌年のヴェローナ奪回をもって、一度はヴェネツィアを窮地に陥れたカンブレー同盟戦争は終結する。ヴェネツィアが危機を乗り越え、戦争の最終局面を有利に運ぶことができた要因はさまざまであるが、官職の「販売」による財源確保の効果も大きかったに違いない。ブレシャ奪回戦のさなかにあった1516年の4月末から6月はじめにかけて、7名の新しいサン・マルコ財務官が生まれ、この7名だけで合計75,000ドゥカートもの臨時収入を政府にもたらしたのである⁽²⁸⁾。

定員が9名である終身職のサン・マルコ財務官が、わずか1か月余りの間に7名も入れ替わることはありえない。要するに、サン・マルコ財務官の「販売」は、財力を持つ者に地位を与えただけでなく、定員枠の有名無実化をも意味したのである。最も多くの新財務官が誕生したのは1522年である。この年、オスマン・トルコ軍が聖ヨハネ騎士団の本拠地ロードス島を包囲し、東地中海における緊張が一気に高まった。同年3月から翌年3月までの1年間に15名がサン・マルコ財務官の地位を手に入れ、1523年には計20名ものサン・マルコ財務官が存在する結果となった⁽²⁹⁾。なかには、弱冠20歳台の若者も数名含まれていた。次章でも述べるように、サン・マルコ財務官の「売官料」（政府への融資額）の相場はおおよそ1万－2万ドゥカートだったので、これらの若者たちがそのような多額の代価を自分で払えたはずはない。彼らにその地位を「買い与えた」のは、父親や一族の年長者である。かつて、サン・マルコ財務官とは、経験豊かで徳の高い人物が就くべきものであった。それがいまや、政治の世界における実績など皆無に近い若者が、一族の財力によって就くことのできるものになったのである。サヌードも、「財務官の権威も地に落ちた」と嘆いている⁽³⁰⁾。

とはいえ、彼らが純粋に金の力だけによって地位を手に入れたわけではない。サン・マルコ財務官に就任するには、大評議会の票決による承認が必要

だったからである。祖国への経済的貢献度が大きな判断基準になったとしても、彼らが曲がりなりにも貴族たちの過半数からサン・マルコ財務官として認められたことに違いはない。また、定員を超えて就任した者たちが単なる「エキストラ」の名目的なサン・マルコ財務官にすぎなかったと考えることはできない。たとえば、「デ・スプラ」の財務庁が16世紀を通じて行なったサン・マルコ地区の「都市改造」において、中心的な役割を果たしたのは、1523年にともに20代でサン・マルコ財務官の地位を獲得したヴェットール・グリマーニとアントニオ・カッペッコであった⁽³¹⁾。官職売買は、寡頭政のもつ金権政治的な性格をいっそう強めたが、なかば逆説的に、権力の中枢にかかわる人々の数を増加させることになった。場合によっては、経歴に関係なく有能な人材を政府にもたらすこともあったであろう。

以上のように、サン・マルコ財務官は、とりわけ16世紀において、ヴェネツィアの寡頭政を最もよく代表する官職であった。次章では、寡頭支配層の具体像を知る手がかりとして、16世紀のサン・マルコ財務官就任者をつまびらかにする。

二、16世紀のサン・マルコ財務官就任者

(1) 就任者一覧

17世紀なかばまでのサン・マルコ財務官就任者についての基本的な情報は、F・サンソヴィーノの『いとも高貴にして比類なき都市ヴェネツィア』の補遺版によって知ることができる。サン・マルコ財務庁について書かれた箇所には、クランごとのサン・マルコ財務官の名が列記されている。また、巻末の年表には、重要なできごとともに、ドージェ、サン・マルコ財務官、書記官長、ローマ教皇などの新任者が日付つきで記載されている⁽³²⁾。いっぽう、サヌードの『日記』には、彼が出席したすべての大評議会における票決の記録がある⁽³³⁾。これらの史料をもとに、いくつかの二次文献から得た情報を補って作成したのが、表1である⁽³⁴⁾。

表1—A：16世紀のサン・マルコ財務官就任者一覧表（1）

（※年号は西暦に修正。就任者名の＃はドージェになったことを、融資額のdはドゥカートを示す。）

年	月日	就任者名	種別	生没年	就任時年齢	在職年数	融資額
1501	10.5	Marino Garzoni	de Citra				
	?	Benedetto da Pesaro	de Supra	1433-1503	68歳	2	
	12.23	Marino Venier	de Supra				
1502	1.22	Paolo Barbo	de Supra				
	12.22	Andrea Gabriel	de Ultra				
1503	8.3	Domenico Trevisan	de Ultra	-1535		32	
	8.23	Marcantonio Morosini	?				
	9.5	Luca Zen	de Ultra				
1504	5.5	Tommaso Mocenigo	de Ultra				
1505	6.16	Domenico Marin	de Citra				
1507	9.7	Antonio Tron	de Citra				
1509	7.28	Andrea Venier	de Supra				
1510	3.21	Giorgio Corner	de Citra	1454-1527	56歳	17	
	4.12	Andrea Gritti #	de Supra	1455-1538	55歳	13	
	12.21	Antonio Grimani #	de Supra	1435-1523	75歳	11	
1513	6.17	Marco Bollani	de Supra				
1516	4.28	Zaccaria Gabriel	de Ultra				
	5.18	Alvise Pisani	de Supra	1467-1528	49歳		10,000d
	5.2	Giorgio Emo	de Citra	-1526		12	
	5.27	Francesco Foscari	de Ultra	1460-1518	56歳	10	12,000d
	6.1	Lorenzo Loredan	de Supra			2	10,000d
	6.2	Alvise da Molin	de Citra				
	6.3	Girolamo Giustinian	de Ultra				12,000d
1522	3.26	Giacomo Soranzo	de Supra				16,000d
	3.26	Marco Grimani	de Citra	1494c-1544	約28歳	6	20,000d
	3.28	Francesco Corner	de Ultra				18,000d
	6.1	Marco da Molin	de Citra				
	6.15	Alvise Pasqualigo	de Supra				15,000d
	6.29	Pietro da Pesaro	de Ultra				
	7.6	Andrea Giustinian	de Citra				
	7.11	Andrea Lion	de Supra				
	7.20.	Andrea Gussoni	de Citra				
	7.23	Francesco Priuli	de Supra				10,000d
	9.28	Carlo Morosini	de Ultra	-1562		40	10,000d
	10.19	Giovanni da Lezze	de Supra	-1577		55	8,000d
1523	1.25	Vettor Grimani	de Supra	1495c-1558	約28歳	35	8,000d
	3.1	Antonio Mocenigo	de Citra				
	3.8	Antonio Cappello	de Supra	1494c-1565	約29歳	42	8,000d
1524	10.2	Leonardo Mocenigo	de Supra				
	10.4	Alvise Priuli	de Citra				
	10.6	Paolo Cappello	de Ultra				
1526	6.6	Gasparo da Molin	de Citra				
	6.13	Pietro Marcello	de Ultra				
	6.17	Lorenzo Pasqualigo	de Ultra				
1527	1.5	Luca Tron	de Citra				

16世紀ヴェネツィアの門閥家系

表1-B: 16世紀のサン・マルコ財務官就任者一覧表(2)

年	月日	就任者名	種別	生没年	就任時の年齢	在職年数	融資額
1528	4.3	Francesco Mocenigo	de Citra				
	5.7	Antonio Priuli	de Citra				18,000d
	5.28	Giovanni Pisani	de Ultra	-1540		12	
1529	4.18	Vincenzo Grimani	de Citra				16,000d
1530	5.30.	Lorenzo Giustinian	de Citra				14,000d
	8.19	Girolamo Zen	de Citra				
1532	10.27	Francesco Dona' #	de Ultra	1468-1553	64歳	13	
1534	12.6	Daniele Renier	de Supra	1458c-1535	約76歳	1	
1535	2.6	Pietro Lando #	de Supra	1480-1545	55歳	4	
1537	6.8	Andrea Cappello	de Ultra	-1565		28	12,000d
	6.1	Girolamo Bragadin	de Ultra				
	6.13	Girolamo Marcello	de Ultra				
	6.13	Giacomo Corner	de Ultra				
	6.19	Bernardo Moro	de Ultra				
	6.21	Giulio Contarini	de Ultra	1500c-1578c	約37歳	41	14,000d
	7.1	Giovanni da Lezze	de Supra	1510-1580	27歳	43	
1538	4.23	Pietro Grimani	de Supra				21,000d
	6.23	Alessandro Contarini	de Citra				
1539	1.21	Vincenzo Cappello	de Supra				
1540	4.3	Sebastiano Giustinian	de Citra				
1541	8.20.	Alvise Gradenigo	de Supra				
1542	5.14	Nicolo' Bernardo	de Supra	-1548		6	
1543	3.15	Tommaso Contarini	de Citra				
1545	11.27	Nicolo' Priuli	de Ultra	-1549		4	
1548	10.10.	Tommaso Mocenigo	de Supra				
1549	5.29	Girolamo da Pesaro	de Ultra	-1552		3	
1550	1.8	Marcantonio Trevisan	de Ultra	1475-1554	75歳	3	
1551	1.10.	Filippo Tron	de Supra	-1556		5	
1553	6.6	Stefano Tiepolo	de Ultra	-1557		4	
1554	5.17	Marcantonio Venier	de Citra	-1566		12	
1556	4.6	Priamo da Lezze	de Citra	-1558		2	
	10.17	Francesco Contarini	de Supra	1497-1556	59歳	1	
1557	3.15	Tommaso Contarini	de Citra	1488-1578	69歳	21	
	5.3	Girolamo Priuli #	de Ultra	1486-1567	71歳	2	
	8.3	Bernardino Venier	de Citra	-1559		2	
1558	3.12	Melchiorre Michiel	de Supra	1489c-1572	約69歳	15	
1559	9.3	Zaccaria Vendramin	de Ultra				
	10.2	Alvise Renier	de Citra	-1560		1	
1560	4.15	Girolamo Grimani	de Citra	1497-1570	63歳	10	
1563	8.16	Giacomo Miani	de Citra				
	12.3	Matteo Dandolo	de Ultra	1495-1570	68歳	7	
1565	2.1	Marcantonio Grimani	de Ultra	1484-1565	81歳	1	
1566	2.27	Alvise Mocenigo #	de Ultra	1507-1577	59歳	4	
1568	5.14	Girolamo Zane	de Citra	1490c-1572	約78歳	4	
1570	4.3	Lorenzo da Mula	de Citra	1498c-1579	約72歳	9	
	5.15	Sebastiano Venier #	de Ultra	1496-1578	74歳	7	
	7.3	Nicolo' da Ponte #	de Ultra	1491-1585	79歳	8	

表1—C：16世紀のサン・マルコ財務官就任者一覧表（3）

年	月日	就任者名	種別	生没年	就任時年齢	在職年数	融資額
1571	1.14	Federico Contarini	de Supra	1538-1613	33歳	42	20,000d
	1.17	Ottaviano Grimani	de Citra	1511-1576	60歳	5	
	1.21	Ludovico Priuli	de Ultra	-1571		1	25,000d
	1.25	Francesco Priuli	de Supra				
	1.28	Alvise Tiepolo	de Citra				
1572	4.27	Marcantonio Barbaro	de Supra	1518-1595	54歳	2	
	5.1	Girolamo Contarini	de Ultra				
	5.4	Girolamo da Mula	de Supra	1540-1607	32歳	35	16,000d
1573	10.25	Andrea da Lezze	de Citra	1527-1608	46歳	35	20,000d
	10.28	Lorenzo Correr	de Citra				
	11.8	Battista Morosini	de Ultra				
	11.15	Andrea Dolfín	de Supra	1540-1602	33歳	29	20,000d
	11.22	Paolo Nani	de Citra				
1575	7.11	Giacomo Soranzo	de Supra	1518-1599	57歳	24	
1576	8.2	Paolo Tiepolo	de Ultra	1523-1585	53歳	9	
	10.17	Marco Grimani	de Citra	-1583		6	
1577	6.13	Paolo Corner	de Ultra	1486-1580	91歳	3	
1578	3.21	Alessandro Gritti	de Ultra	-1582		4	
	12.15	Vincenzo Morosini	de Citra	1511-1588	67歳	10	
1580	2.29	Nicolo' Venier	de Citra	1520c-	約60歳		
	3.8	Giacomo Foscarini	de Supra	1523-1602	57歳	22	
	8.18	Giovanni Michiel	de Ultra				
1582	3.1	Gianfrancesco Priuli	de Ultra	1515-1592	67歳	10	
1583	12.29	Pasquale Cicogna #	de Citra	1509-1595	74歳	2	
1584	7.24	Francesco Corner	de Supra	1521-1584	63歳	1	
	10.31	Giacomo Emo	de Supra	1510-1596	74歳	12	
1585	4.3	Agostino Barbarigo	de Ultra	1514-1587	71歳	2	
	8.2	Antonio Bragadin	de Citra	1510-1591	75歳	6	
1587	3.28	Francesco Duodo	de Ultra	1518-1592	69歳	5	
	10.20.	Luca Michiel	de Citra	1519-1596	68歳	9	
1588	4.1	Marino Grimani #	de Citra	1532-1605	56歳	7	
1591	7.26	Leonardo Dona' #	de Citra	1536-1612	55歳	15	
1592	2.15	Alvise Zorzi	de Ultra	1515-1593	77歳	1	
	11.17	Domenico Duodo	de Ultra	1513-1596	79歳	4	
1593	6.5	Alvise Giustinian	de Ultra	1521c-1601	約72歳	8	
1594	9.24	Giampaolo Contarini	de Supra				
1595	4.28	Pietro Marcello	de Citra	1521-1596	74歳	1	
	7.4	Giovanni Mocenigo	de Supra	1531-1598	64歳	3	
1596	3.11	Bernardo Sagredo	de Citra				
	7.18	Giovanni Soranzo	de Citra	1520-1603	76歳	7	
	12.2	Antonio Cicogna	de Ultra				
	12.27	Paolo Paruta	de Ultra	1540-1598	58歳	2	
1598	6.23	Giovanni Dolfín	de Supra	1545-1622	53歳	26	
	12.6	Giacomo Renier	de Ultra	1529-1616	69歳	18	
1599	11.27	Zaccaria Contarini	de Ultra	1522-1602	77歳	3	

(Francesco Sansovino, *Venetia città nobilissima et singolare*, Cronico, pp.54-64 などより筆者作成。)

表1には多くの欠点があることを断っておかねばならない。まず、史料間に少なからぬ齟齬がみられることである。そのすべてを検証することは現段階では無理なため、ここではサンソヴィーノの補遺の年表を基準とした。第二の欠点は、生没年が不明なために就任時の年齢や在位年数がわからないケースが多いことである。また、前任者の死亡による欠員にともなって選出されたのか、それとも、定員枠を無視して、つまり官職売買によって選出されたのか、特定できるケースも限られている。だが、現段階で判明しているデータにもとづいて、一定の分析と考察を行なうことは十分可能であろう。

表1から第一に読み取れることは、就任者数が突出している年・時期と、そうでない時期があるということである。突出しているのは、1516年、1522年、1537年、および1571-73年である。1516年と1522年の状況は前章で述べたとおりであるが、1537年と1571年代のヴェネツィアは、より深刻な事態にあった。いずれも、東地中海に着々と勢力を拡大しつつあったオスマン・トルコとの直接対決である。プレヴェザの戦いの火蓋が切って落とされる前夜の1537年、ヴェネツィアは緊急軍備に総力をあげていた。ガレー軍艦を建造する国立造船所アル・セナーレはフル稼働し、ガレー漕手に志願する者には人気の高い大兄弟会スクォーラ・グランデへの特別入会が認められた⁽³⁵⁾。この年にサン・マルコ財務官就任者が目立って多いのも、戦費調達を目的とする官職売買が実施されたからにちがいない。そして1571-73年は、キプロス戦争である。世界史上名高いレパントの海戦はこの戦争初期の一局面であったが、その勝利にもかかわらず、最終的にヴェネツィアは東地中海最大の要衝キプロス島をトルコに奪われてしまうのである。

16世紀のヴェネツィアは、国家存亡にもかかわるほどの深刻な危機を繰り返し経験した。そのような状況下において、原理的な共和主義は非効率な理想にすぎない。必要なのは、機動力を持つ少数の有能な人材、そして金である。16世紀のヴェネツィアで寡頭政と金権政治が強まったのは、現実の要請によるものにほかならなかった。サン・マルコ財務官の「販売」は、このような文脈の中で理解されねばならない。

データは断片的ながらも、これら4つの時期には、高額な「買官料」と引き換えに年若くして就任している者が多い。カンブレー同盟戦争以来、国家的危機の際には官職売買が戦費調達の手当となっていたことがわかる。しかし、他の時期には、だいたい年に一人程度の新任者しか出ておらず、就任時の年齢も総じて高い。ここから、官職売買は常習化していたわけではなく、基本的には緊急時だけの臨時措置だったことが推測できる。よって、16世紀ヴェネツィアの政治が官職売買によってすっかり腐敗・変容してしまったとみなすべきではなく、むしろ平時には正常な選出方法が保たれていたといえるだろう。

しかし、正規の選挙によってであれ、官職売買によってであれ、ひとたびサン・マルコ財務官に就任した者は、ドージェになるか、まれに聖職に転向する場合を除いて⁽³⁶⁾、死ぬまでその職にあり続けた。その意味において、若者がサン・マルコ財務官に就任することを可能にした官職売買の影響を過小評価することはできない。就任時の年齢が低ければ低いほど、サン・マルコ財務官という強大な力を持つ地位を長期にわたって保つことができたからである。

その最たる例は、1522年に8,000ドゥカートでサン・マルコ財務官となったジョヴァンニ・ダ・レッツェである。彼の生年は不明だが、没年が1577年であることから、就任時にはかなり若かったことが推測される。そして在職期間は、実に55年という長さであった。その次に在職期間が長いのは、彼と同姓同名のジョヴァンニ・ダ・レッツェである。1537年にサン・マルコ財務官となったこの人物は、43年間、その地位にあり続けた。前者と後者の血縁関係は现阶段では確認できていないが、レッツェ家のクラン規模はさほど小さくなかったため、ある程度の近親であったものと思われる。

ところで、後者については、きわめて興味深い事実がある。それは、1556年にサン・マルコ財務官となったプリアモ・ダ・レッツェが、彼の実の父親だということである。そして、息子は「デ・スプラ」、父親は「デ・チトラ」の部局に属していたとはいえ、父親が亡くなるまでの2年間、親子は同時に

16世紀ヴェネツィアの門閥家系

サン・マルコ財務官の地位にあった。また、1573年に20,000ドゥカートの「買官料」で「デ・チトラ」の財務官となったアンドレアは、プリアモの孫であり、その就任時にまだ存命中であった父親のジョヴァンニは1580年まで生きた。さらに、表1には含まれないが、アンドレアの息子のジョヴァンニも1620年にサン・マルコ財務官に就任し、1622年に死去している。要するに、レッツェ家のこの血筋は、アンドレアが死去した1608年から息子のジョヴァンニが就任する1620年までの12年間を除いて、1522年から1622年までの1世紀間、4世代にわたってサン・マルコ財務官である成員を持ち続けたのである(図1参照)⁽³⁷⁾。

図1：レッツェ家家系図
(カッコ内はサン・マルコ財務官就任年)



ところで、ジョヴァンニ・ダ・レッツェが父プリアモより約20年も先にこの最高官職のひとつに就任していることは、一見すれば奇異に感じられる。父親をも差し置いて、政治経験の乏しい若者がサン・マルコ財務官のような要職に就くとは、いったいどういうことなのか。この謎を解く鍵は、サン・マルコ財務官が終身職である点に見いだされるだろう。すなわち、政治的能力や人徳よりも国家への融資額によって当落が決まる場合には、一族のうちで期待できる余命がより長い者を候補に立てる戦略がとられたと考えられるのである。サン・マルコ財務官の多岐にわたる職能と社会的影響力は、一族にとって利益と威信の源だった。一族の中に一人でも多く、またできるだけ長く、サン・マルコ財務官が存在することが、大きな意味をもったのである。

よって、次節では、サン・マルコ財務官就任者を家系の観点から分析していくことにする。

(2)家系的分析

表2は、表1をもとに、サン・マルコ財務官就任者137名をクラン別にまとめ、輩出数の多いクラン順に並べたものである。サヌードによれば、1527年にはヴェネツィアの貴族階級に134のクランが存在していたが⁽³⁸⁾、16世紀に1名以上のサン・マルコ財務官を出したのは56クランのみである。

16世紀に最も多くのサン・マルコ財務官を出したのは、グリマーニ家(10名)である。続いて、コンタリーニ家(9名)、プリウリ家(8名)、モチエニーゴ家(7名)、ヴェニエル家(6名)となり、これら上位5クランだけで全体の約30%を占める。また、コルネール家とジュスティニアン家は各5名、カッペッロ家・レッツェ家・モロジーニ家は各4名を出し、合わせて10のク

表2：16世紀のサン・マルコ財務官就任者上位輩出クラン

順位	クラン名	サン・マルコ財務官輩出数	累積人数(%)	1527年の成年男子数(順位)
1	Grimani	10	10(7.3%)	27(24位)
2	Contarini	9	19(13.9%)	172(1位)
3	Priuli	8	27(19.7%)	56(8位)
4	Mocenigo	7	34(24.8%)	27(24位)
5	Venier	6	40(29.2%)	69(5位)
6	Corner	5	45(32.8%)	44(16位)
	Giustinian	5	50(36.5%)	45(15位)
8	Cappello	4	54(39.4%)	10人以下
	Lezze	4	58(42.3%)	10人以下
	Morosini	4	62(45.2%)	102(2位)
11	Marcello	3	65(47.4%)	77(4位)
	Michiel	3	68(49.6%)	67(6位)
	Molin	3	71(51.8%)	50(12位)
	Pesaro	3	74(54.0%)	25(27位)
	Renier	3	77(56.2%)	10人以下
	Soranzo	3	80(58.4%)	10人以下
	Tiepolo	3	83(60.6%)	10人以下
	Tron	3	86(62.8%)	26(26位)
	13家	2	112(81.8%)	
	25家	1	137(100%)	

(表1より筆者作成。)

16世紀ヴェネツィアの門閥家系

ランで全体の45%以上を占める。

ヴェネツィア共和国では、同一クランから複数の成員が同時に同じ官職に就くことが禁じられていたが、サン・マルコ財務官の場合は、部局が異なれ

表3：16世紀のサン・マルコ財務官/クラン別在職延べ年数（判別分のみ）

クラン	在職年数							延べ合計年数
Lezze	55	43	2	35				135
Contarini	41	19	42	3				105
Grimani	11	22	34	10	1	5	7	97
Cappello	40	28						68
Morosini	40	10						50
Mula	9	35						44
Trevisan	32	3						35
Dolfin	29	5						34
Soranzo	24	7						31
Dona'	13	15						28
Michiel	15	9						24
Pisani	12	12						24
Barbaro	23							23
Foscarini	22							22
Corner	17	3	1					21
Venier	12	2	7					21
Renier	1	18						19
Gritti	13	4						17
Priuli	4	2	1	10				17
Tiepolo	4	9						13
Emo	12							12
Duodo	5	4						9
Ponte	8							8
Giustinian	8							8
Dandolo	7							7
Mocenigo	4	3						7
Bernardo	6							6
Bragadin	6							6
Pesaro	2	3						5
Tron	5							5
Lando	4							4
Zane	4							4
Foscari	2							2
Cicogna	2							2
Barbarigo	2							2
Paruta	2							2
Renier	1							1
Zorzi	1							1
Marcello	1							1

(表1より筆者作成)

ば同じクランでもかまわなかったし、官職売買が行われて定員を超える就任者が選ばれる際には、この規則が厳密に守られてはいなかった。また、サン・マルコ財務官候補者は、大評議会で過半数の賛成票を集めなければ当選できなかった。したがって、クラン規模が大きければ、それだけサン・マルコ財務官就任者を出しやすかったとも考えられるのであるが、実際には、サン・マルコ財務官輩出数とクラン規模の間には、目立った相関関係はみられない。むしろ、1位のグリマーニ家と4位のモチェニーゴ家の1527年の成年男子数はともに27名で、貴族階級の中では中規模のクランである。クラン規模が比較的小さいにもかかわらず上位に入っているクランは、一族内におけるサン・マルコ財務官の比率が高かったことになる。よって、グリマーニ家が16世紀に10名のサン・マルコ財務官を出していることと、1527年に172名の成年男子を擁していたコンタリーニ家が9名のサン・マルコ財務官を出していることの間には、単なる1名という差を超えた大きな違いがあると言わねばならない。

前節で述べたように、サン・マルコ財務官と家系との関係では、就任者の数だけでなく、在職年数も重要であるが、没年が不明な人物については在職年数も明らかにできない。表3は、判明分のみをまとめたもので、あくまでも参考程度にしかならないが、上位のクランが延べ数十年から百年以上にわたって、サン・マルコ財務官である成員を持っていたことは理解されるであろう。

もうひとつ重要なのは、姻戚関係である。16世紀のヴェネツィアでは共和主義の理想がなかば形骸化していたとはいえ、権力の集中を防ぐためのシステムは機能していた。大半のことは投票で決められたため、政策にしる法律にしる官職にしる、自分が望む方向に事を運ぶには、より多くの賛成票を集めることが必要だった。そこで効力を発揮したのが、義理の親子・兄弟や従兄弟の協力である。とくに、ドージェをはじめとする高位官職の選挙では、同じクランに属する者の相互推薦や相互投票が妨げられていたので、クランを異にする姻戚の役割は大きかった⁽³⁹⁾。

16世紀ヴェネツィアの門閥家系

図2：グリマーニ家家系図（1）
（カッコ内はサン・マルコ財務官就任年）

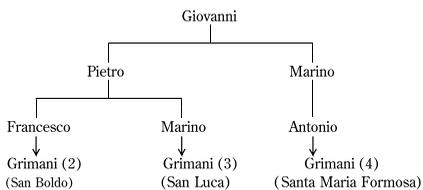


図3：グリマーニ家家系図（2）：サン・ボルド地区
（カッコ内はサン・マルコ財務官就任年）

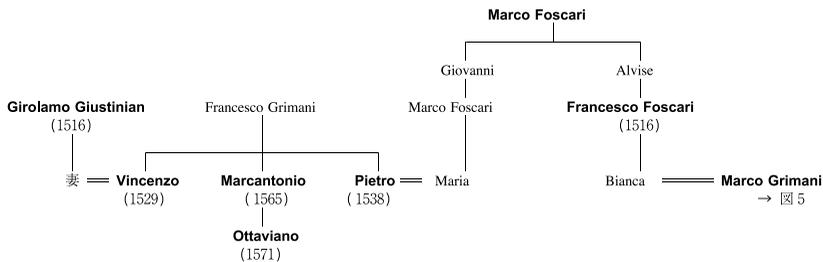


図4：グリマーニ家家系図（3）：サン・ルカ地区
（カッコ内はサン・マルコ財務官就任年）

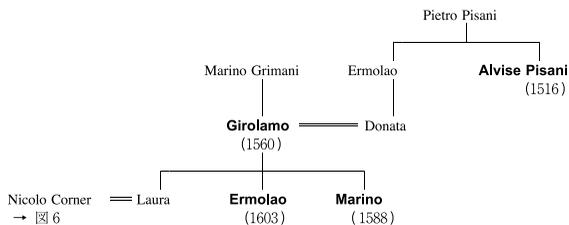


図5：グリマーニ家家系図（4）：サンタ・マリア・フォルモーサ地区
（カッコ内はサン・マルコ財務官就任年）

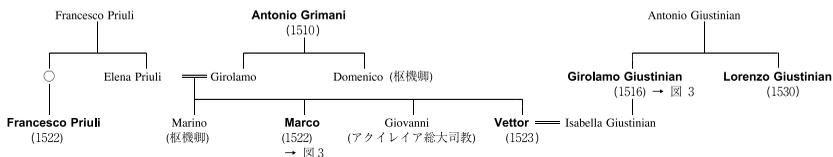
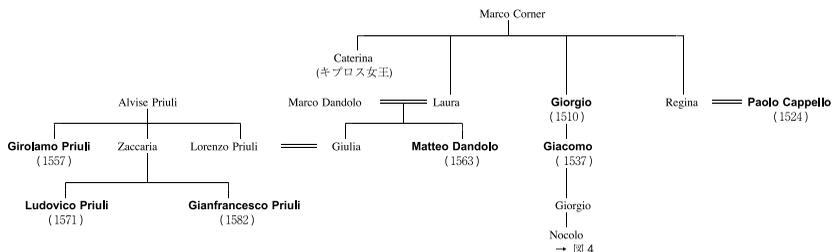


図6：プリウリ家・ダンドロ家・コルネール家家系図
（カッコ内はサン・マルコ財務官就任年）



ヴェネツィア貴族の婚姻関係はきわめて複雑に入り組んでいるため、その詳細をすべて明らかにすることは困難である。ここでは、表2において1位となっているグリマーニ家を中心にみていくことにしよう⁽⁴⁰⁾。グリマーニ家は、16世紀までに3つの系統に分岐していた。それぞれ、屋敷のあった教区から、サン・ポルド教区のグリマーニ家、サン・ルカ教区のグリマーニ家、サンタ・マリア・フォルモーサ教区のグリマーニ家と呼ばれる（図2参照）。まず、サン・ポルド教区の系統からは、ヴィンチェンツォ、ピエトロ、マルカントニオ、オッタヴィアーノの4名のサン・マルコ財務官が出ており、ジュスティニアン家やフォスカリ家との婚姻関係がみとめられる（図3参照）。サン・ルカ教区の系統からは、16世紀にジローラモとマリーノの2名のサン・マルコ財務官が出ており（マリーノは1595年にドージェになった）、コルネール家やピザーニ家と婚姻関係を結んでいた（図4参照）。コルネール家とピザ

16世紀ヴェネツィアの門閥家系

一二家は、16世紀のヴェネツィアで一、二を競う大富豪であった。コルネール家はコルネール家で、プリウリ家やダンドロ家、カッペッロ家といった旧家と縁続きであった（図6参照）。そして、サンタ・マリア・フォルモーサ教区のグリマーニ家からは、1521年にドージェに昇格したアントニオと、その孫であるマルコとヴェットールがサン・マルコ財務官となり、プリウリ家、フォスカリ家、ジュスティニアン家とつながっていた（図5参照）。ここに示したうち、図3～6の4つの家系図だけで、16世紀に就任したサン・マルコ財務官137名中の22名までもが登場するのである（15世紀に就任したマルコ・フォスカリと17世紀に就任したエルモラオ・グリマーニを除く）。

以上のように、少なくとも本稿が検証の対象とする16世紀には、サン・マルコ財務官就任者の一部の家系への集中傾向と、サン・マルコ財務官輩出家系間の密接な婚姻関係を認めることができる。無論、サン・マルコ財務官就任者のみをもって有力家系を断定することには慎重でなければならない。しかし、寡頭支配であったとされる16世紀のヴェネツィアにおいて、具体的にどの家が「門閥家系」であったのか、と問われたとき、われわれは、少なくとも本稿の表2や家系図に表れたクランがその主要な構成要素をなしていた、と答えることができるだろう。

むすび

16世紀のヴェネツィアにおいて、サン・マルコ財務官は、単なる名誉職ではなく、強大な実権を持つ最高官職となっていた。サン・マルコ財務官としての権限に加え、元老院と十人会の永久メンバーであり、その他の要職をも兼ねることのできたサン・マルコ財務官は、ヴェネツィア共和国のエリート中のエリートであったといってよい。その地位は、正規の選挙手続きだけでなく、常にというわけではないにしろ、官職売買によっても手に入れることができた。その両方を通じて多くのサン・マルコ財務官を出したクランは、しばしば長期にわたって国家権力の中枢にかかわる成員を持ち続け、婚姻関

係によって他のサン・マルコ財務官輩出家系と結びついていたのである。

本稿では、サン・マルコ財務官をとおして16世紀ヴェネツィアの門閥家系の特定を試みた。一般に、貴族階級とは家を重んじるものである。貴族位が世襲によって獲得され、貴族が国家を支配していたヴェネツィア共和国では、なおさら家や血筋に対する意識は強烈であったと思われる。とはいえ、共和政のヴェネツィアでは、門閥家系に属する者だけが権力に与っていたわけではないことを見誤ってはならない。たとえ有力家系の出身でなくとも、資質のある貴族ならば、サン・マルコ財務官やその他の要職に選ばれ得た。何人もサン・マルコ財務官を出した家々があったいっぽうで、クラン内でただ一人のサン・マルコ財務官であった者たちの存在もまた、無視することはできないのである。今後は、より細やかなプロソポグラフィーによって、ヴェネツィアの寡頭政の実態を明らかにすることが求められるだろう。

註

- (1) セッラータおよびヴェネツィア貴族階級の定義については、Frederic C. Lane, 'The Enlargement of the Great Council of Venice,' in J.G. Rowe & W.H. Stockdale (eds.), *Florilegium Historiale: Essays presented to Wallace K. Ferguson*, Toronto, 1971, p.254; Id., *Venice. A Maritime Republic*, Baltimore-London, 1973, pp. 111-117; 永井三明「ヴェネツィア貴族階級の確立とその背景」『史林』第63巻第5号, 1980 (同『ヴェネツィア貴族の世界 社会と意識』刀水書房, 1994所収); Stanley Chojnacki, 'Social Identity in Renaissance Venice: The Second Serrata,' *Renaissance Studies*, 8, 1994; Id., 'Identity and Ideology in Renaissance Venice: The Third Serrata,' in John Martin & Dennis Romano (eds.), *Venice Reconsidered: The History and Civilization of an Italian City-State, 1297-1797*, Baltimore-London, 2000, pp.263-294など参照。
- (2) ただし、非嫡子である場合を除く。
- (3) 「家系」という語には、曖昧さがつきまとう。すなわち、クラン（同姓集団、氏族）という大きな枠組みをさす場合もあれば、その内部で枝分かれした、より細かな系統をさす場合もあり、また、姻戚をも含めた拡大的な一族を暗に意味する場合もある。本稿においては、上記の定義のうち、前二者をそれぞれ、「クラン」、「系統」と呼び、「家系」は最も広い意味で用いることとする。ただし、第二章の家系的分析は、クランを基準として行なう。各人物の系統の特定がきわめて困難であるのが、その第一の理由である。また、セッラータから2世紀を経た16世紀のヴェネツィアでは、多くの貴族家系が複数の系統に分岐し、同じ姓を名乗っていても単なる遠戚にすぎない場合も珍しくなかったとはいえ、同一クラン内に同姓集団としての連帯感がなかったわけではなく、同一クランから同一官職に複数の就任者が選出されない政治上の原則も機能しているなど、クランの概念が完全に形骸化していたわけではないからである。
- (4) Angelo Ventura, 'Considerazioni sull' agricoltura veneta e sulla accumulazione originaria del capitale nei secoli XVI e XVII,' *Studi Storici*, IX, 1968, pp. 675-679; 和栗珠里「ヴェネツィア芸術の隆盛と土地所有」『イタリア学会誌』第40号, 1990, pp.183-188。
- (5) Robert Finlay, 'Politics and the Family in Renaissance Venice: The Election of Doge Andrea Gritti,' *Studi Veneziani*, n.s., 2, 1978, pp.97-117; Id., *Politics in Renaissance Venice*, London, 1980。
- (6) Giuseppe Liberali, *Le «dinastie ecclesiastiche» nei Cornaro della Chà Granda*, Treviso, 1971; Id., *Il «papalismo» dei Pisani «dal Banco»*, Treviso, 1971。

- (7) Lane, *Venice. A Maritime Republic*, pp.251 – 273.
- (8) Paul F. Grendler, ‘The Tre Savi Sopra Eresia 1547 – 1605: A Prosopographical Study,’ *Studi Veneziani*, n.s., 3, 1979, pp.283 – 340; Id., ‘The Leaders of the Venetian State, 1540 – 1609: A Prosopographical Analysis,’ *Studi Veneziani*, n.s., 19, 1990, pp.35 – 85.
- (9) Robert Finlay, *Politics in Renaissance Venice*, London, 1980; 藤内哲也「近世ヴェネツィアにおける「柔らかな寡頭政」 —1516–26年のサヴィオ・グランデ選出をめぐる— (1) (2)」『人文科学論集』(鹿児島大) 第59–第60号, 2004; 同『近世ヴェネツィアの権力と社会「平穏なる共和国」の虚像と実像』昭和堂, 2005, pp.31 – 8。
- (10) Lane, *Venice. A Maritime Republic*, p.429; Giuseppe Cappelletti, *Relazione storica sulle magistrature venete*, Venezia, 1873 (ristampa, Venezia, 1992).
- (11) レインは、ドージェ (1名), ドージェ顧問官 (6名), 国家審問官 (3名), サヴィオ・グランデ (6名), 十人会の長 (3名) の計19名を国家権力の核心を構成する要素として「インナー・サークル内輪」と呼んだ。Lane, *op.cit.*, p.429。
- (12) Procuratoreとは、「世話をする人」の意味である。語義上の起源は古代ローマのプロクラトール、すなわち財務執政官にさかのぼることができる。
- (13) Gasparo Contarini, *La Repubblica, e i magistrati di vinegia*, Venezia, 1551, p.230。住民の遺言執行人としての機能については、高田京比子「サン・マルコ財務官と中世ヴェネツィア都市民 —遺言書史料に見る行政機構の発展—」『史林』84巻5号, 2001, pp.34 – 65。
- (14) Francesco Sansovino, *Venetia città nobilissima et singolare, con le aggiunte di Giustiniano Martinioni*, Venezia, 1663 (ristampa, Venezia, 1998), pp.297 – 298。
- (15) 市民階級は、貴族階級と庶民階級の間中に位置し、一定の特権を持っていた。とくに政府書記官は市民階級のおもな職業のひとつであった。James S.Grubb, ‘Elite Citizens,’ in John Martin & Dennis Romano (ed.s), *Venice Reconsidered. The History and Civilization of an Italian City – State, 1297 – 1797*, Baltimore, 2000, pp.339 – 364; 藤内哲也「近世初頭のヴェネツィア書記局官僚層の形成とその意義」『史林』80巻5号, 1997。
- (16) サン・マルコ財務庁の建物が広場北面に建設されたのは12世紀である。これは16世紀前半に改築され、16世紀末から17世紀にかけて広場南面に新館Procuratie Nuoveが建設されたのにもない、旧館Procuratie Vecchieと呼ばれるようになった。Giulio Lorenzetti, *Venice and its Lagoon. Historical – Artistic Guide*, Trieste, 1975,

- pp.414 - 141。
- (17) Reinhold C. Mueller, 'The Procurators of San Marco in the Thirteenth and Fourteenth Centuries: A Study of the Office as a Financial and Trust Institutions,' *Studi Veneziani*, n.s., 13, 1971, pp.105 - 220。以下、財政面に関する本稿の記述は、この論文に依拠している。
- (18) *Ibid.*, pp.123 - 132。
- (19) Denis Romano, 'Molto ben sepe guidar la optima constelation sua: Francesco Foscarini as Procurator of San Marco,' *Studi Veneziani*, n.s., 36, 1998, pp.37 - 55。
- (20) *Ibid.*, pp.44 - 46。
- (21) 15・16世紀に就任したドージェのうちサン・マルコ財務官を経験しなかった4名は、ジョヴァンニ・モチェニゴ (Giovanni Mocenigo, 位1478 - 1485), フランチェスコ・ヴェニエル (Francesco Venier, 位1554 - 1556), ロレンツォ・プリウリ (Lorenzo Priuli, 位1556 - 1559), ピエトロ・ロレダン (Pietro Loredan, 位1567 - 1570) である。
- (22) たとえば, Archivio di Stato di Venezia, *Scuola Grande di San Giovanni Evangelista*, regg.12 - 14; *Id.*, *Scuola Grande di San Marco*, regg.4 - 6など。一般に、ヴェネツィアにおける兄弟会は非貴族の領域だったと考えられているが、^{スウェーデン}大兄弟会の場合は、きわめて多くの貴族会員がいた。和栗珠里, 'Le Scuole Grandi e i nobili nella Venezia rinascimentale,' 『地中海学研究』第31号, 2008, pp.23 - 38。
- (23) Marin Sanudo, *I Diarii di Marino Sanuto*, a cura di Fulin, R. et al., 58 voll., Venezia, 1879 - 1903 (ristampa, Bologna, 1969 - 1970), passim。
- (24) Contarini, p.229; Cappelletti, p.100。
- (25) Mueller, pp.120 - 121。
- (26) *Ibid.*, p.121。「^ソ定員^シ外^ク委員」については, Lane, *Venice. A Maritime Republic*, p.256。
- (27) Felix Gilbert, 'Venice in the Crisis of the League of Cambrai,' in J.R. Hale (ed.), *Renaissance Venice*, London, 1973, pp.284 - 285; Bruce Boucher, 'Il Sansovino e i Procuratori di San Marco,' *Ateneo Veneto*, 174° anno accademico, vol.24 - n.1 - 2, 1986, pp.61 - 62。実際は「販売」ではなく融資であるが、一般に官職売買とみなされている。
- (28) *Ibid.*。
- (29) *Ibid.*。
- (30) Sanudo, XXXIII, 589。
- (31) 和栗珠里 「「ポスト・カンブレー期」ヴェネツィアの寡頭支配層とパトロネジ」

- 『西洋史学』第214号, 2004, p. 14。
- (32) Sansovino, pp.300-305; *ibid.*, Cronico pp.1-86。
- (33) Sanudo, *passim.*
- (34) おもな二次文献は, GilbertとBoucherである。
- (35) Archivio di Stato di Venezia, *Scuola Grande di San Giovanni Evangelista*, reg.13, c.146r-v。兄弟会では, 会員の傷病者への援助, 死者の弔い, 遺族への援助が行われたため, とくに有力な兄弟会への入会は, 戦地に赴く者たちにとって保障の意味を持った。
- (36) ヴェネツィアでは, 聖職と国家官職を兼ねることは禁じられていた。表1のなかで, 聖職に就くためにサン・マルコ財務官を退位したのは, 1522年に就任したマルコ・グリマーニである。彼は, アクイレイア総大司教であった兄のマリーノが枢機卿になるのにもない, アクイレイア総大司教の地位を引き継いだ。*Dizionario biografico degli italiani*, Roma, vol.59, 2002, pp.633-638。
- (37) Grendler, pp.64-74。
- (38) Sanudo, XLV, 569-572。
- (39) Finlay, 'Politics and the Family in Renaissance Venice'。
- (40) 以下, 家系図についてはおもに, Archivi di Stato di Venezia, M.Barbaro, *Arbori di patrizi veneti*, Miscellanea codici I: Storia Veneta, rr. 17-23を典拠とした。

Family and Power in the 16th Century Venice

— *Procuratori di San Marco* and those families —

Juri WAGURI

The 16th century Venice is generally conceived to be oligarchic. Under the aristocratic régime, influential noble families weaved up kin-group network and tried to divide among themselves important state offices. But it remains unclear which specific families were the most ‘influential’.

This paper aims at solving this question through the analysis of the *Procuratori di San Marco* (PSM abbr.). The PSM were one of the most important state offices. They were originally no other than the custodians of the treasury of the St. Mark’s Basilica. But because those appointed to the PSM were considered the most wise men in Venice, many people entrusted their property and legacy to them. Not only the individuals but also the government utilized the PSM as depository of various incomes. From 1454 the PSM could sit and vote in the Senate, from 1496 could hold the office of *Savio Grande* concurrently, from 1523 could sit and vote as *zonta* members in the *Consiglio dei Dieci*. Thus by the 16th century, the PSM had come to wield a tremendous power in every way: financially, politically, socially and culturally.

For the noble families, having more than one PSM member was a great source of honor and profit. The 16th century made it easier for rich families to obtain the PSM position by a kind of ‘simony’ of the state offices. One notes that in such cases very young nobles, even in their twenties and obviously with little experience in the political world, were elected

to the PSM. It may seem strange because the PSM were second only to the *Doge* (Prince) in the hierarchy of the Venetian Republic and the position for eldest members of the aristocracy. But it becomes understandable if we take into consideration that the PSM were, different from all the other offices but the Dogeship itself, lifetime position which its holders could keep as long as they lived. In other words, it was family tactics to put a young member in this position in order to stay close to the core of the power as long as possible.

Analyzing all the PSM elected in the 16th century, we find that five families, namely, the Grimani, the Contarini, the Priuli, the Mocenigo and the Venier, occupied about 30 percent and with other five, namely, the Corner, the Giustinian, the Cappello, the Lezze and the Morosini, the top ten families occupied more than 45 percent. And a genealogical study reveals intricate matrimonial relations among them.

In this way, we can identify the most influential families of the 16th century Venice. However, we must not forget that the Venetian Republic was not totally oligarchic. Not a few PSM who didn't belong to these families were also great leaders of the time. For a further understanding of the early modern Venice, more detailed prosopography will be required.